

蒼井村正  
表紙イラスト／或十せねか

カーズイーター  
呪詛喰らい師外伝

夏祭り封神譚

試し読み版

二次元ぷち文庫

2D PETIT POCKET NOVELS

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された  
『呪詛喰らい師外伝 夏祭り封神譚 前編』  
『呪詛喰らい師外伝 夏祭り封神譚 後編』  
に基づいて作成しております。

※本作はあとみっく文庫『呪詛喰らい師 1～3』（キルタイムコミュニケーション刊）とともにお読みいただけますと、よりお楽しみいただけます。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



カースイーター  
呪詛喰らい師外伝

夏祭り封神譚

蒼井村正

表紙イラスト / 或十せねか

## 登場人物紹介

---

### Characters

ときわぎさき

#### 常磐城咲妃

『呪詛喰らい師』という異名を持つ凄腕退魔士。百八柱の淫神を封印する使命を帯びている。この春、槐宝学園に転入してきた。

#### 宴会部長

咲妃のクラスメイトのひとり。賑やかなことが大好きで、夏祭りでは皆と遊ぼうとしたが早く来てしまい、咲妃の伽の現場を見てしまう。

#### クバンダ

古代インドに語り継がれる邪淫の悪霊。二人の少年に取り憑いている。

「はああ、ちよつと早く着きすぎちゃったなあ」

紺色に大輪の花柄をあしらった浴衣姿の少女は、祭りの準備でざわめいている周囲を見回しながら、自嘲気味につぶやいた。

彼女は私立槐宝学園に通う女子学生。

わずかに脱色して栗色にした髪を、すつきりとしたショートカットに整え、活発な子猫を連想させる、目鼻立ちのくつきりとした顔立ちをしている。

クラスでは、宴会部長として各種イベントを率先して企画、実行する、リーダー的な女子生徒であった。

今日も、海浜公園で行なわれる夏祭りの開催に合わせて、花火見物とカラオケパーティーを企画していたのだが、ちよつと張りきりすぎて、待ち合わせ時間よりかなり早く到着してしまったのだ。

（じつと待っているのつまらないから、お祭り現場の下見して置こうかな……）

浴衣姿の少女は、午後の陽光を浴びながら、祭りのメイン会場である遊歩道に沿って歩いてゆく。

夕暮れまでまだしばし間のあるお祭り会場周辺には、開店準備中の屋台が並び、気の早い連中が開店を待ちつつ行き交っていた。

かき氷、焼きそば、リング餡、金魚すくい、色とりどりのお面や玩具……着々と組み上

がってゆく屋台や、辺りに漂う様々な匂いが、祭りに対する期待感を膨らませる。

屋台の並ぶ遊歩道を抜けた先には、純白の砂浜が広がっていた。

砂浜に面して、数軒の海の家が並んでいるが、どの店もまだ営業していない。

（海開きは来週か……あゝ、水着新調しなきゃ。スリーサイズは、去年と全然変わってないけど……）

貧乳以上、美乳未満の胸を、浴衣越しにそつと撫でて苦笑を浮かべた少女は、爽やかな潮風に吹かれながら、立ち並ぶ海の家の一番組までやってきた。

「むう、思ったほど時間つぶせなかったなあ……時間鬼余りだよ」  
小さくため息をつき、もと来た道に戻ろうとしたその時、

「ンッ、ふぁ、あんッ……！」

あからさまに色っぽい響きを帯びた女の喘ぎ声が聞こえてきた。

「うお！ このエッチな声……こいつはちよつと聞き捨てなりませんなあ、ニユフフッ♪」  
好奇心に瞳を輝かせた浴衣少女は、声の聞こえてくる方向を探り、一番組に建っているプレハブ造りのシャワールームに目を付けた。

どうやら、オープン前の海の家に誰かが忍び込んで、淫らな行為に耽っているらしい。

「はああ、ンンッ、そんなに……舐めるな……ひゃああうンッ！」

息を潜めてシャワールームに近づいてゆくにつれて、さらに艶めかしく裏返った声が、

少女の鼓膜をくすぐり、思春期真つ只中の肉体をゾクゾクと疼かせる。

（一体、どこを舐められたら、あんなにエッチな声が出ちゃうんだろ？ ちよつと覗くだけ……そう、ホントにちよつとだけですよお……）

胸の高鳴りを抑えつつ、建て付けの悪いドアの隙間から、室内をそつと覗き込んだ。

（うわあ、マジでエッチの真つ最中だよ……しかも、男二人相手の3Pですかあ!）

内部で展開されていたのは、想像以上に淫靡な行爲であった。

こちらに背を向けて立ったのは、髪の長い女性が、水着姿の若者二人に左右のバストを舐めしゃぶられ、尻を荒々しく揉みこねられて喘いでいる。

二人の若者は、女の胸に顔を埋めているため、顔立ちはわからないが、それなりに引き締まった身体つきをしており、トランクスタイプの水着だけをまとった裸身は浅黒く日焼けしていた。

一方、二人がかりで嬲られている女の方は、色白で、背後から見てもそれとわかるほどの巨乳の持ち主であった。

日焼けした男の顔を包み込んだポリウムたつぷりの乳肉が、ムニユツ、と柔らかくひしゃげているのが、腋の下から垣間見えている。

ウエストは見事にくびれ、理想的なシェイプを描いてムッチリと張り出した豊かなヒップが目を引く、若々しさと妖艶さを併せ持った見事なプロポーションの持ち主だ。

（やだ、あの女の人、凄い格好してる、あれって絶対、水着じゃないよね？）  
覗き見ている浴衣娘の眉をひそめさせたのは、女のいでたちであった。

二人の若者に抱擁され、淫戯を仕掛けられている女性の肢体は、どう見ても水着とは思えない革帯によって、エロチックな緊縛を施されている。

深紅の革帯と金色の金具を組みあわせた扇情的なボンデー装束は、色白な肉体の各所を締め上げ、尻の谷間に深々と食い込んで、メリハリの利いた肢体を一層妖艶に飾り立てていた。

さらに、右足と左腕は、皮膚にピッチリと密着した黒いラバーストッキングとロンググロープに包まれていて、フェティッシュさを一層際立たせている。

「んっ、そんなに強く吸うんじゃない、跡が……残ってしまうじゃないか、ひああうんっ！」  
ジュルジュルといやらしい吸い音を立てて乳肉を吸われた女は、ビザールルックに彩られた極上ボディを震わせ、艶めかしい声を上げる。

（あの声、何だかすっごく聞き覚えがあるような気が……まさか、うちの学校の女子？  
顔が見えたら、誰だかわかりそうなのに……何だかモヤモヤするよお）

記憶の片隅に引っかかるものを感じつつ、浴衣娘は息を吞んで、二人の若者に愛撫されている女の色っぽい後ろ姿を見守り続ける。



「最高のオツパイだけ、身体中舐めしゃぶって、キスマークだらけにしてやるよ」

舐めしゃぶっていた女の胸から、唾液と汗に濡れ光る顔を上げた若者は、低い声で言うと、ことさら下品な吸い音を立てて、たわわな乳肉にむしゃぶりつき、量感たっぷりな尻を鷲掴みにして揉みこねた。

「くあ、アツ、んツ、あああんっ！」

乳房を甘噛みされ、尻たぶをもぎ取りそうな勢いでこね回された女は、色っぽい声をシヤワールーム内に響かせ、革帯緊縛された裸身を悶えさせる。

若々しい張りと、ムツチリとした量感を併せ持った見事な逆ハート型の美尻は、若者達の手指で好き放題に弄り回されて、食べ頃の白桃のように紅潮していた。

「尻も最高だな……おや、このプニプニした感触の穴は肛門かな？」

無遠慮な指は、尻たぶの狭間に深々と侵入して、革帯越しに最も恥ずかしいすばまりを捉えて激しく穿り責めているようだ。

「はあああ……んツ、そこは……やつ、くふううんっ！」

ボンデージ越しとは言え、最も触れられたくない恥穴をまさぐられた女は、男達の荒々しく執拗な愛撫に抗って激しく身悶えした。

「それじゃあ俺は、オマ○コの方を触ってやるよ……おお、フワフワで、温かくて、マシユマロみたいだな」

秘部を守る革帯に沿って、若者の指が何度も滑り、恥丘を荒々しく揉み立て、秘部のワレメに指先を食い込ませて責め廻る。

（うわあ、ひよつとして、アソコとお尻の穴、同時に弄られてる!? こっ、これはエロすぎるッ!）

興奮で身体が汗ばんでくるのを感じつつ、好奇心旺盛な浴衣娘は、小振りなヒップを無意識にくねらせてしまいながら、覗き行為に没頭してゆく。

女が激しく抵抗したせいで立ち位置がわずかに変化し、乱れた黒髪に隠された横顔と、唾液と汗に濡れ光る豊かなバストの曲面が垣間見えた。

（うわあ、やっぱり、オッパイおっきいなあ。Fカップ……いや、G以上はあるかな?もしかしてそれ以上かも……うう〜）

二人の若者が顔を埋めている乳房は、小振りなメロンほどのポリウムを誇示してお椀型に突き出し、乳首と乳輪がかるうじて隠れる幅の革帯に巻かれて、量感をさらに際立たせている。

「それにしても、すげえオッパイだな。いくら舐めても飽きないぜ……」

若者の一人が顔を上げて言うと、唾液まみれになった乳房の曲面をネットリと舐め上げ、白い歯を柔肉に浅く食い込ませて、弾力たっぷりの肉果を噛み責める。

「んあ、はああう……んッ、ああああ……くああうッ!」

張り詰めた乳肉を唾液まみれの舌が這い、甘噛みしつつ吸い上げるたびに、ボンデー姿の女性は、たまらなく色っぽい声を上げて、メリハリの利いた緊縛裸身をわななかせた。（やっぱり、あの声、聞き覚えがあるけど、誰だか思い出せない。……うう、何だかアタシまでウズウズしてきちゃった）

乳房を貪られ、尻と股間を好き放題に弄り回されているボンデー女の痴態を覗き見ているうちに、浴衣少女の身体も疼き始めている。

恥骨の裏側辺りに、むず痒い尿意にも似た感触が込み上げ、体温の上昇に伴って、十代のきめ細かな素肌が、浴衣の内側でじつとりと汗ばんでゆく。

「なあ、乳首、直に舐めさせろよ」

貪っていた豊乳から顔を上げた若者が、革帯越しにバストの先端を舐めながら、興奮した口調で女に声を掛ける。

決してイケメンとは呼べぬ若者の顔は、浅黒く日焼けしており、噴き出た汗で、油を塗ったかのようにぬめ光っていた。

「ダメだ……まだ……くふうっ！ 噛むんじゃないッ！ つあ、ああああんっ！」

申し出を拒絶した女は、乳先を守る革帯をツン、と突き上げた乳頭を荒っぽく噛み責められ、顔を大きく仰け反らせた。

長く艶やかな黒髪がフワリと翻り、汗ばみ紅潮した女の素顔があらわになる。

(えっ!! ……まさか、とつきー!!)

苦悶の喜悦の入り交じった表情を浮かべる女の顔を見た浴衣娘の目が、大きく見開かれた。

二人の若者と淫靡な行為に耽っている少女は、クラスメイトである転入生、常磐城咲妃に間違いないかった。

(とつきー、猥談好きでエロい娘だとは思ってたけど、まさかリアルエロでボンデージ着用して3Pまで体験ですかあ!! 鬼エロなんですけどお……)

驚きと同時に興奮を強めた少女は、生唾を呑み込み、級友と男達の絡みを凝視し続ける。「乳首しゃぶられるのが嫌なら、キスしようぜ」

分厚い唇をスケべつたらしく笑み歪ませながら言った若者は、咲妃の同意も得ずに、喘ぐ唇にむしゃぶりついた。

「んむううんっ! ンッ……くふううん……ッ!」

苦しげな呻きを漏らしながらも、ボンデージ姿の少女はたいした抵抗もせずに強引な口づけを受け入れ、クチュクチュと唾液の鳴る音を立てて口腔内を掻き回されている。

密着していた唇が、唾液の糸を引きながら離れると、軟体動物の交尾のように絡みあう舌のエロチックな動きが垣間見えて、覗き見ている浴衣娘に生唾を呑み込ませた。

「おい、おまえばかりずるいぞ。俺にもキスさせろよ!」

咲妃の豊乳から腋の下まで唾液まみれにして舐めまくっていた少年が、咲妃の髪を荒々しく掴んで、自分の方に顔を向けさせる。

「くぁ！　ンンンッ！」

「ヒヒヒヒッ、いい顔しやがるぜ。吸え！　俺の舌にフェラするんだ！」

苦痛に歪む咲妃の顔全体に舌を這わせた少年は、粘っこい唾液を滴らせる舌を唇の狭間にねじ込んだ。

暴力的な少年の命令に、咲妃は素直に従い、口腔内を犯す舌に奉仕を開始する。

「んふ……んッ、ちゅば、ちゅば……ちゅるっ……はふ……あむ……んっ、んっ、ンッ」  
赤黒く分厚い若者の舌を吸いついばみ、唾液たっぷりの口腔内に迎え入れて舌を絡ませると、満足げな鼻息を漏らしたニキビ面の少年は、さらに深いキスを仕掛けながら、メリハリの利いたボンデージ肢体を好き放題に揉み弄った。

もう一人の少年に、首筋や耳を舐めしゃぶられながら、頬をすぼめて舌を吸う少女の顔には、嫌悪や屈辱の表情は浮かんでいない。

それどころか、心地よさげな吐息を漏らし、自ら舌を差し伸べて、決してイケメンとは言えない二人の少年達と濃厚なキスを交わしている。

少年達が彼女を誘ったのか、あるいはその逆なのかはわからないが、常磐城咲妃が、合意の上で、陵辱まがいの性行為に及んでいるのは明らかだった。

そのすぐ下で恥ずかしげに小皺を引き結んだアヌスの蕾も、排泄器官とは思えぬ初々しいピンク色で清浄なたたずまいを見せて、異形と化した少年達と、金縛りになった少女の欲情を煽り立てた。

「綺麗なおマ○コだな、色も、形も、匂イモイイ！」

「モウ、濡れてヤガルゼ。マン汁が溢れそうじゃナイカ！」

長い首をくねらせ、股間に顔を寄せた異形の淫神が、卑猥な解説を交えた感嘆の声を漏らす。

「そつ、そんなに近くで見ると。息が……くすぐつたい。ふあ……ンンッ」

敏感な部分を息がかかるほどの至近距離で視姦され、恥ずかしい指摘をされた咲妃は、恥じらいの表情を浮かべて緊縛肢体を強張らせた。

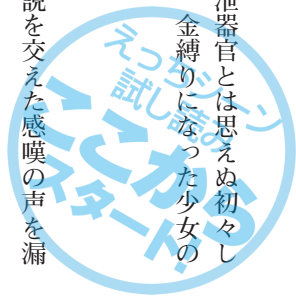
「ヒヒヒヒヒッ、イイ表情だな。モット辱めてヤル。濡れ濡れのオマ○コ、舐メマクツテイカセテヤルゼエ！」

長く伸びた赤黒い舌が、甘酸っぱい蜜臭を香らせる美麗な粘膜炎に迫ってきた。

「ヌア!? な、ナンダ？ 舐メラレナイ……押し返サレルゾ……！」

性器を食ろうとした淫神が、困惑の声を上げる。

腿の付け根から性器周辺の柔肌に舌を這わせることはできるのだが、いざ、秘裂を責めようとすると、目に見えぬ壁のようなものに阻まれてしまうらしい。



「無駄だ……そこは故あって、強力な封印によって守られている」

未練がましく腿の付け根を舐め回している舌の感触に、くすぐったげに身をよじりながら、咲妃は震える声で告げる。

「ダメカ……。ナラバ、コッチハ、ドウダ？」

性器を責めることを諦めた長い舌が、そのすぐ下に位置する、最も恥ずかしいすぼまりをヌロツ、と舐め上げた。

「ヒツ！ ふあ！ はあああうツ！」

アナルを舐められた瞬間、M字開脚状態の緊縛ボディが、ビクビクンツ！ と電撃に打たれたような過剰反応を見せて跳ね上がる。

「ホホオ、コッチハ舐められるゾ！ 随分感度ガイイじゃないカ。イツモ、ケツマ〇コでセックスしてイルのカ？」

きつく引き締まった菊座に交互に舌を這わせながら、淫神と化した若者は恥ずかしい尋問を仕掛けてくる。

清浄感溢れるローズピンクのアヌスは、たちまちのうちに生臭い唾液に濡れまみれ、艶めかしさをさらに際立たせて敏感にヒクついた。

「皺がプルプルしてイテ、いい舌触りダ！ 味もイイ！」

「グフフツ、ヒクヒク動いてイヤガルゼ！ 舐められテ、感じてるンダな？」

言葉責めに恥じらった咲妃は、唇をキュツ、と嘯み、無言で目を伏せた。

「その顔、ソソルゼ！ コノ敏感ナ肛門、狂うマデ舐めてヤル！」

「ひあ！ きゅふううう……んッ、あつ、やつ、はああああんッ！」

ビチャビチャとせわしない舌なめずりの音を立てながら、淫神クバンダは、感度抜群の不浄門に二枚の舌を舞い踊らせる。

性器を舐められなかった不満を晴らすかのように、異形の少年達は恥じらい悶える美少女のアナルを執拗に責め立て、恥辱の快感を送り込んだ。

放射状に走る小皺の一本一本を尖らせた舌先で舐めなぞり、キュツ、と固くすぼまった中心を執拗に掘り返し、充血して盛り上がり始めた秘め穴の周囲をクルクルと円を描いて舐めくすぐる。

「くっ、んっ、くふうっ、ひあ、ンンッ！」

貪欲な舌の集中攻撃を受ける尻穴をきつく収縮させながら、ボンデージ姿の少女は切れ切れの声を上げてムツチリと肉感的な尻を跳ねさせた。

美貌を歪めて喘ぐその顔は、先ほどまでの余裕の表情は消え失せ、津波のように押し寄せるアナル快感に必死に抗っている。

（とつきー、凄く感じて……お尻の穴舐められるのって、そんなに気持ちいいの？ やだ、アタシまで……変になっちゃうよお）



最も恥ずかしい場所を舐め穿られてよがり悶える級友の痴態を見せつけられているうちに、浴衣娘の尻穴もムズムズと妖しく疼き、秘裂もジツトリと潤み始めていた。

「ソロソロ、中モ舐めてヤルゾ！」

唾液が滴り落ちるまで舐め解したアヌスに、赤黒い腐肉のような舌先があてがわれ、放射状の小皺をこじ開けながら、ゆつくりと侵入してゆく。

「くあ……あ、はああああんツ！」

甘い悲鳴を上げながら、咲妃はすぼまりを強引に押し開こうとする舌先の圧力に抗い、下腹全体を緊張させて陥落を拒む。

「グヒヒヒヒ、抵抗スルダケ無駄ダゾ……先が入ッタゾ……いい味ダナ」

無駄な抵抗をあざ笑いながら、輪ゴムのように収集するアヌスの筋肉リングを強引に引き伸ばした赤黒い肉の責め具は、直腸内に侵入を果たした。

それ以上の侵入に抗おうとしても、徹底的なアナル舐めで疲労した肛門括約筋は、舌の圧力に抗えず、ついに屈服してしまう。

「そおら、一気ニ、イクぞ！」

くちゅ……じゅぷつ……ズルルッ！

さらに圧力を強めた舌が、尻穴に二十センチ近くめり込んだ。

「あ、あ、あああああッ!!」

恥辱の関門を突破され、悲痛な声を上げた咲妃の下半身が、ビクビクビクンッ！ と痙攣する。

「入ったゾ……イイ締めつけダナ。温かくて、美味イ！」

長く伸び出た味覚器官を脈動させながら、淫神クバンダは淫蕩な笑みを浮かべる。

緩んだすぼまりの中心に、ざらついた太い舌が、巢穴に潜り込むウナギのようにどんどん吸い込まれてゆく。排泄経路を逆行して侵入してきた軟体肉は、神伽の巫女の直腸内をミッチリと満たした。

「ひあ！ あ、あ、そんな……んあああッ！」

熱くざらついた異形の味覚器官が、尻穴の奥で妖しく蠢き始めると、咲妃は引きつった声を上げて、汗と唾液に濡れ光る美尻を跳ねさせた。

「コンナニ奥まで挿れられるのは初めてダロウ？ 尻穴でイキまくらせてヤル！」

人の舌では到底届かぬ深淵にまで侵入した淫神の舌が、妖悦にわななく直腸壁を舐めながら挿挿を開始する。

直腸を満たしていた淫らな腐肉器官が、むず痒い排泄感を伴って引き出され、先端が抜け落ちる寸前で、再び肛門を押し広げながら、奥の奥まで突き挿れられる。

「んくうううんっ！ くはあ、あつ、あ、はあああう……んっんっんっ、ふうあ、あ、ひぐううっ！」

舌をきつく締めつけた桃色肉の蕾が、強引な抜き挿しのたびにまくれ返り、メリハリの利いた裸身が、内臓を突き上げられ犯される魔性の快感に悶え狂う。

「ドウダ？ 効くダロウ？ 延々とクソし続けてイルみたいな感じダロウ？」

陰湿な口調で淫神が指摘したとおり、粒立った味蕾組織が、直腸粘膜や鋭敏な肛門の肉リングをゾリゾリと掻き擦り、S字結腸が圧迫されて、狂おしいほどの排泄欲求を発生させていた。

「はああう……ひぐうんツ！ あ、うあ……んふうう……くふうんツ！」

直腸を張り詰めさせていた異物が強制排泄され、圧迫感から解放された安堵の喘ぎが起きらぬうちに、生暖かく湿った肉塊が容赦なく潜り込んでくる。

排泄の快感と、軟体が挿入される違和感が交互に肛門を襲い、神伽の巫女の美貌を苦悦に歪めさせた。

抜き挿し遊びに飽きたクバンダの舌は、やがて腸奥に居座ったまま、ウネウネと卑猥な蠢きで内臓粘膜に悪戯を仕掛けてくる。

「あつあつあッ！ そつ、そんなに奥を……なつ、舐めるなあ……あひい……ッ！」

「ココカ？ 奥ノ方ノ、ココガ感じルのカ？ ナラバ、もつと舐めテヤルゾ」

ヌチュヌチュと異様な音を立てて、二枚の舌が咲妃の肛門を激しく犯し、探り当てた急所を容赦ない舐めしやぶりで責め立てる。

「ひぐううんっ！ うあ、あああ、アッアッアッ、そこは……ひああああウンッ！」

アヌスに深々と潜り込んだ舌が、どのように卑猥な動きをしているのか、革帯ボンデージ姿の少女は、触手緊縛された全身を振らせて身悶え、引き締まった腹部に筋肉の凹凸をくつきりと浮き出させて豊満な尻をはね上げた。

「グヒヒヒヒッ、イツちまいな！」

不気味な笑い声を上げたクパンダは、内臓を撚る舌の動きをさらに激しくして、神伽の巫女を絶頂へと追い込んでゆく。

「ひああああうんっ！ イッ、イクッ……イクふううううんんんッ!!」

透き通った絶頂の叫びで、室内の空気を震わせながら、咲妃は恥辱のアナルエクスタシーに仰け反って痙攣する。

「マダマダあ！ ケツマ〇コは連続シテ絶頂デキルんだヨオ！」

尻穴を犯す二枚の舌は、絶頂中の直腸内でさらに激しく暴れ回った。

「イクううううっ！ また、イクッ、いつ、ひあ！ はああああん……ッ！」

立て続けの絶頂を迎えたボンデージボディが、触手緊縛を振りほどかればかりに痙攣する。

プシイイッ！ ピシュウツ、びゆるっ、プシヤアッ！

挿入を拒みながらも、絶頂までは抑えきれなかったヴァギナの奥からも、白濁した愛液

が射精さながらの勢いで噴き出した。

スperlマの淫臭に満たされたシャワールーム内に、甘酸っぱく疊惑的な少女の匂いがフワリ、と立ちのぼる。

「ああ、とつきーが、お尻で……イッてるう……」

目の前でアナルアクメに達した級友の痴態を見つめながら、鼻にかかった声を漏らした浴衣娘。秘裂の奥が切ない疼きと共に収縮し、ショーツの股布に、熱い濡れ染みがジワリ、と広がってゆく。

「グヒヒヒッ。堪能したぜ！」

又チュツ……ジュポツ！

唾液の糸を引きながら、アナルエクスタシーに震えるすばまりから舌が引き抜かれた。

「くあ、はああ……ンッ」

M字開脚で触手緊縛された裸身がグツタリと弛緩し、連続絶頂の余韻に喘ぐ。

薄紅色に充血してヒクついたアヌスから、淫神が注ぎ込んだ大量の唾液が溢れ出し、床に滴った。

「モウ我慢できネエ！ コノ淫乱なケツマ○コに、チンポをブチ込ませてもらうゾ！」  
若者達の股間から長く伸び出たペニス、二本同時にあてがわれた。

薄紅色に充血したアヌスに突きつけられた男根は、カリ首の張り出しも凶悪で、亀頭の

サイズは誇張抜きで子供の握り拳ほどもある。

硬く張り詰めた赤黒い肉胴には、毒々しい紫色の血管が浮き出していて、小さくすぼまった尻穴に挿入できるとはとても思えぬ巨根であった。

(とつきーのお尻……犯されちゃう。あんなに大きなオチンチン、挿れられてズボズボって突き上げられちゃう……)

恐怖心と同時に、背筋がゾクゾクするような妖しい期待感が背筋を駆け抜け、浴衣娘は級友の可憐な菊花に押し当てられた凶悪な牡槍を凝視してしまふ。

ぬちゅ、ぐちゅ、ぎちゅつ、ぎちゅるっ！

薄紅色に充血した菊門で、硬く張り詰めた二つの亀頭が、互いの先汁にまみれながらせめぎあう。

「えっ?! まっ、待て、二本一度には、むっ、無理だ！」

アナル絶頂の余韻で放心状態だった咲妃は、すぼまりを圧迫する肉凶器を見下ろし、引きつった声を上げる。

「無理やりねじ込ムノガ気持ちいいンじゃないカ！ 行クゾ！」

ぎちゅつ、ぎちゅいいいいっ！ ぐぶううっ！ ズギュルッ！

抗う間も与えず、二つの亀頭が同時にアヌスに挟り込まれた。

薄紅色の筋肉リングが限界まで引き伸ばされ、慎ましやかに引き結ばれていた肛皺が完

全に伸びきってしまうほどの大拡張だ。

「くあ！ ああああああ……ッ！」

許容量を超える異物をねじ込まれ、悶絶寸前の声を上げて仰け反る咲妃の肛門に、筋張った二本の肉茎が容赦なくめり込んでゆく。

赤ん坊の唇のように慎ましくすぼまっていた肛門括約筋は、捻りを加えて突き込まれた勃起によって強引に押し広げられ、今にも裂けてしまいそうなほどに痛々しく張り詰めたがらも、かろうじて挿入を受け入れていた。

「ほおら、入ッタジャナイカ。ヤッパリ、セックス慣れしたケツマ○コダナ！」

シャワールームの床にへたり込んで、呆然と見つめる浴衣少女の眼前で、悪夢のような触手陵辱が展開された。

ズチュツ、ズギゆるッ！ ズンツ、ズンツ、ズチュルンツ！

触手ならではの長さを活かし、絡みあつた剛直が痛々しく拡張されたアヌスを容赦なく突き上げ、奥の奥まで蹂躪して掻き回す。

「はぎいっ！ いっ、くはああう！ んっ、アッ、かはあ……ッ！ ふっ、太すぎるッ！ 深すぎるッ！ あ、あ、あ、あひいんっ！ くあ、はああンンンッ！」

舌とは比べものにならない質量の肉凶器をアヌスに啜え込まされた神伽の巫女は、引きつった声を上げて、ボンデージボディを跳ね上がらせた。

たわわなバストが縦横無尽に揺れ弾み、勃起乳首の先端から迸った乳汁が、室内に振り撒かれる。

「イイ声ダ！ 鳴ケ！ もっとモット、色っぽい声を出すンダ!!」

激しい突き上げに狂い泣く女体を、天井に届かんばかりに揺すり立て、邪淫の神は性器を犯せぬ鬱憤をアヌスにぶつけて犯し抜いた。

尻穴を犯す二本の触手ペニスは、交互に抽挿したかと思うと、タイミングを合わせて腸奥まで一気に突き挿れられ、人の性器では到達不可能な深みにまで侵入して、ボンデージ美少女の内臓を蹂躪する。

「グヒヒヒヒッ！ 腸壁のプルプルが気持チイイゾ！」

「コノ淫乱女、内臓モ、最高ダ！ 犯されテ悦ンデイヤガルゼ！」

荒縄のように捻れあつた触手ペニスでアヌスを挟り抜きながら、淫神クバンダは、勝ち誇つた声を上げる。

「はああう、んっんっんっ、あ、くあ……くふううんっ！ あ、はああ、あ、そこお、深いッ！ 深すぎるッ！ ひぐうううっ、ふあ……あああ、奥に届いて……はあああんッ！」

肛膚が続くうち、苦しげだった咲妃の喘ぎ声も、次第に甘い響きを増し、ボンデージ姿の艶やかな裸身も、尻穴を犯す肉凶器を歓迎するかのようにくねり始めていた。

緊張の弛んできた括約筋が、柔軟な収縮を見せつけて肉茎を締めつけ、粘液と汗に濡れ



光る裸身が、しなやかに鍛え上げられた筋肉のうねりを見せてつけて、内臓を犯す触手の動きに淫らな反応を返す。

「スツカリ夢中ダナ、他ノチンポにも奉仕シロ！」

ここぞとばかりに、二十本のペニスが奉仕を求めて群がってきた。

「はああ……硬い……んふう……んんっ」

従順に応じた咲妃は、尻を突き上げる巨根の動きで上下に揺れながら、残る陰茎への奉仕を開始する。

細くたおやかな両手指が勃起の胴を握り締め、緩急交えた指使いで擦り上げる。M字開脚されたままの足指も器用に動いて、足コキ奉仕をねだって押しつけられる肉棒に快感を送り込む。

「ひあう！ そんな所も……ンッ、はふうううッ」

滑らかな脇の下を、粘液まみれのペニスに擦られ、くすぐったげに身をよじりながらも、神伽の巫女はキュッ、と脇を締めて、勃起を挟み込んで刺激する。

上腕二頭筋と脇の下が作り出した擬似膺に、カリ首を張り出させた指ペニスが潜り込み、小刻みな挿挿で柔肌の窪みを犯す。

「ああ、胸にも……はああんっ！」

巻き締められて搾乳続行中の乳房は、たわわな肉果の谷間に三本の触手を挟み込み、粘

液の鳴る音を立ててパイズリ奉仕していた。

柔らかな乳肉の狭間で揉みくちやにされた触手男根は、大量の粘液を分泌しつつ、ウナギの群れのようにくねりながら果肉を犯し抜く。

突き上げの衝撃に重々しく揺れ弾む爆乳に絡みついた触手は、母乳を滴らせる乳先を亀頭で觸り、鈴口のワレメに咥え込んで、異様な快感でさらなる射乳に誘う。

「うあ……あああ、母乳が……止まらないッ！ あああ、乳首が狂うッ……！」

母乳と、絶え間なく塗りつけられる先走りの粘液がグチュグチュと音を立てて混じりあい、敏感な勃起乳頭は、小さなペニスのような脈動を繰り返して甘い乳汁を射出し続けた。

噴出した母乳は、乳首を觸る亀頭にこね回されて精液や先走りの粘液と混じりあい。クリーム状の粘液となつて、快感に張り詰め震える乳球の曲面を流れ伝つてゆく。

「チンポ、舐メロ！」

だらしなく涎を垂らして喘ぐ口元に、数本の触手ペニス突きつけられた。

「はう、んぷ……ちゅぷ、あむ……ちゅぱ、くちゅ、ちゅぷっ……」

ムンムンと牡臭く湿った熱気を立ちのぼらせる肉凶器を嫌がるそぶりも見せず、咲妃は亀頭に唇を吸いつかせ、濃厚なフェラチオ奉仕を開始する。

舌先を突き出して、亀頭先端の敏感な縦スジをチロチロと舐めくすぐり、張り詰めた先

端部に満遍なく舌を這わせて唾液に濡れ光らせてから、口腔深くに咥え込んで頭を激しく振った。

激しいイラマチオ奉仕の動きで、艶やかな黒髪が揺れ、汗ばみ上気した頬が窪んで、口を犯すペニスをきつく吸う。

「んは……はあう……んっ、ちゅば、あむ……はう……んふうう……ンッ」

ひとしきり喉粘膜で扱き上げた亀頭を吐き出し、唾液と先汁でドロドロになった先端を舐め清め、軽く歯を立てて、鮮烈な刺激で淫神の男根を震わせた。

「エロいフェラチオする女ダナ。チンポが蕩けチマイソウダゼ」

卑猥な笑みを浮かべた淫神は、尻穴を突き上げる巨根の動きを早め、二十本の触手ペニスを駆使して、咲妃の全身を撻り抜く。

「とつきー、凄い……気持ちよさそう……あああ」

羨ましげなつぶやきを漏らす浴衣娘の存在など完全に忘れ去ってしまったかのように、咲妃と異形の神との淫辱行為は続く。

口唇奉仕を待てぬ触手は、紅潮した頬や耳、眉にまで亀頭を擦りつけ、髪の中にも這い込んで、牡臭い体液で汚し抜いていた。

腿に巻きついた触手ペニスは、美脚を包んだラバーストッキングの内部に侵入し、伸縮性に富んだ黒い生地越しに亀頭の輪郭をくつきりと浮き上がらせて抽挿を続けている。

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**